

時代に合ったつながり方

みなさんは「マルハラ」という言葉をご存じですか？私は通勤途中の車中で、この言葉を初めて聞いたのですが、最初はどういう意味かさっぱり分かりませんでした。その後「マルハラ」の意味と理由が詳しく説明されたのですが、それを聞いた私は思わず自分の耳を疑ってしまいました。

「マルハラ」→「〇ハラ」→「。ハラ」・・・。「マルハラ」は「マルハラスメント」の略で、文章のやり取りの最後に句点の「。」が付くことにストレスを感じる現象を言うそうです。SNS やコミュニケーションアプリが発展し、短い言葉でスピーディーにやり取りをする機会が増えている昨今、若者世代はメッセージに句点を使う機会が少なくなりつつあり、句点の「。」は見慣れていないため、メッセージに使われると冷たさを感じてしまったり突き放されているように感じてしまったりするそうで、その現象が「マルハラスメント」の始まりのようです。

私たち教職員は、毎日ポータルサイトやメモのやり取りなどを通して当たり前「。」を使います。さすがに学校現場においては、「。」を使うことに対して「マルハラ」なんて言う職員はいないかと思いますが、もはや「なんでもハラスメント」のこの時代に対して、私は益々人間関係に溝がでるのではないかとこのことを危惧してしまいました。決して「ハラスメント」自体を肯定する訳ではありませんし、言葉を選ぶことも必要です。「相手との関係性ができていれば」ということも理解できます。ただ「相手が不快に思うとハラスメント」という相手の主観によってハラスメントか否かが決まるのであれば、「マルハラスメント」のように予想もしないことで「ハラスメント」と捉えられることもあり、そう考えると恐怖すら覚えてしまいます。もはや積極的にコミュニケーションを図ろうとする行動自体が委縮したり、機会が減ったりしていくような気がするのです。

私が初任者の頃は、自校の教頭先生に「初任者は朝一番に来て玄関前を掃除」「お茶の準備をしない」、地区初任研の懇親会では、他校の校長先生に「お前はお酌に来なかったな」など、今では考えられないようなお言葉をいただきました。大学を卒業したばかりの私にとっては、ただただ驚きの連続でしたが、世の中のことを何も知らなかった私にとっては、上下関係や言葉遣い、挨拶や先輩への心遣いなど、ある意味「教師である前に社会人であれ、社会人である前に人であれ」という人間教育を受けたような気がします。また、何を言われてもめげない気持ちや反骨心など、心を強くしていただいたようにも思います。

最近「退職代行」という職業があるそうですが、もはや自分の気持ちを自分の言葉で話せない人が増えているのが現実と考えると寂しい限りです。「飲みケーション」という言葉も今では死語になりつつあるかもしれませんが、自分たちは同僚や先輩と飲んだり遊んだりすることでリフレッシュし、「また明日から頑張ろう」という気持ちになっていました。ただ時代は変わっていきます。コミュニケーションが希薄な時代と言われるかもしれませんが、SNS で自分を発信したり、SNS を通して情報を得たりすることに長けている現代の人々にとっては、それが「つながる」ということかもしれません。時代に合った「人とのつながり方」はあるのでしょうか、私はやはりアナログで、顔を合わせたり、酔っぱらったりしながら話したいなと思います。「自分を知ってもらうには、まず相手の事を知りなさい」という言葉がありますが、敢えて自分から話し掛けたり、声を掛け合ったりすることを大事にしていきたいと思います。